

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号ではついにWestern Electricが登場。1930年代に開発されたモノラルパワーアンプ「WE 118A」を紹介することにしてしよう。



WE 118A power amp

1938年頃に映画音響用に開発され、RCA社が世界で初めて1936年頃に軍事用に開発したビーム4極管の6L6を4本使用して出力50Wを実現したモノラルパワーアンプ。この頃から映画館は入館者数の増大を受けてスピーカーシステムも大掛かりとなり、この頃はまだ15Wクラスのアンプしかない時代に開発された画期的なアンプだった。その後1940年になると同社がRCA-6L6Gをベースに真空管350Bを開発し、有名な124シリーズのパワーアンプの生産が始まる。118Aパワーアンプはシアター用に開発されているため、中域音の表現が豊かで力強く歯切れの良い低音が特徴的。その後の1947年には後継機として350B/6L6を4本搭載した75W出力の143パワーアンプが開発された。

第32回 Western Electric

アメリカで1881年頃から通信と映画産業の音響機器を最先端で開発していたAT&Tの製造部門として存在した会社で、RCA社と共にアメリカの音楽、映画産業を支えていた企業である。当時まだ始まったばかりの通信と音響機器の開発には膨大な予算と人材が投入され、今でもそのクオリティの高い製品が年代を経ても世界中のマニアに支持されている。特に1930年代から1950年代に開発されたスピーカー、アンプ、真空管類は現在生産されているハイエンドのオーディオ機器にも強い影響を与えている。



ラインパネル。手前左側が入力用端子パネル、右側が電源、アウトプット用端子パネルとなっている

搭載トランス。角型のトランスカバーで内部にビッチで振動止めされたパーマロイコアのトランスが搭載されている。手前中央がアウトプットトランス、右奥がチョークトランス、左奥が電源トランスである

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Western Electric



電源部/出力部。電源用の整流管は5Z3が1本、出力管には6L6(今回の個体は6L6GB)が4本搭載



入力部。インプットトランスには618-Cが搭載され、6J7 2本で増幅される

原寸大の音を思わせる 恐るべき生命感を再現

地下1階と2階をぶち抜いたMさんの広々としたオーディオルームに、すっかり長居させてもらっている。この現実離れした空間で、前回はエレクトロボイスのパトリシアIVを聴いた。そのときのアンプはマッキントッシュ。プリがC22、パワーがM1-75だった。だがオーナーはこのコンビ一筋ではなく、別のアンプでもパトリシアを楽しんでる。それがウエスタンのWE 118Aだった。このアンプの持ち味を知るために、マッキントッシュと聴き比べてみることにした。

前回と同じく、マイルス・デイヴィスが1958年に黄金メンバーと行ったセッションから「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」を両アンプで連続して聴いてみる。

見た感じでいうと、時代を考えても当たり前だろうが、WE 118Aの方が古色蒼然としている。質素な業務用アンプ然としている。

だが音はこの風貌とは打って変わってモダンだった。マッキントッシュよりも明瞭でスタジオモニターの。質感のリアリティは上かもしれない。とにかくまったくノスタルジックではない。

マッキントッシュがあくよかでもリッチな方向に対し、出るところは出るが基本的にはタイトでよく締まっている。キャラクターを主張してくるような演出がなく、これが原寸大の音と思わせる。恐る

べき生命感があふれている。

ブランド力を超えてなにかと崇拝すらされているウエスタン製品を、それほどなのかなあ?と個人的に疑問がないわけではない。だがこうしてWE 118Aの神秘的ともいえる力を体験するとやっぱりとんでもないメーカーだったんだなと納得せざるを得ない。ストレートに言うところ「1930年代に作られたアンプだから? ひえーマジかよ」なのである。

当然モノラル時代のアンプだから、左右は別個に誕生し、まったく別の環境で使われていた期間を経ている。双子のように左右の音色が揃っていることもその「マジかよ」に含まれている。調整はかなりたいへんだったのではないかな。

次はムターが弾く「チャイコフスキー」ヴァイオリン協奏曲。カラヤン指揮ワイーン・フィル。

マッキントッシュはおいしいトーンでもてなしてくれる。WE 118Aはヴァイオリンの細かい表情がよく見え、極めて真摯な姿勢でソリスを忠実に再現しようとする。このあたりはいかにもプロユースである。

ほかにもヴォーカルものなど何曲か聴いたがマッキントッシュは、わりとすぐにアンプの個性が把握できるのに対し、ウエスタンはソリスによって美点が変わるような感じがした。何枚も聴く必要があった。その懐の深さもウエスタン神話を生んでいるのかもしれない。